

「教育県岡山」の成り立ちとこれから ～新しい教育を岡山から～



令和3年8月
岡山県教育委員会

【表紙の写真等】

左上：国宝旧閑谷学校講堂（岡山県）

右上：山田方谷像（高梁方谷会蔵）

左下：地域と連携した探究学習におけるフィールドワーク（県立総社高等学校）

右下：授業における1人1台端末の導入（県立倉敷天城中学校）

1 おかやまの教育の伝統

本県は、古代から文化の発祥地として栄え、現代でも多くの遺跡、構造物や伝統行事、数多くの博物館など、文化に親しむことができる環境が整っています。

(江戸時代の教育)

江戸時代には、各地で藩士や庶民のための教育機関が作られました。

特に、岡山藩主池田光政は、領民の生活が成り立つように領地を治めるためには、武士だけでなく、地域のリーダー達にも教育が必要と考え、1670年に世界で最古の庶民のための公立学校である閑谷学校を設立しました。閑谷学校は、他藩にも注目されるとともに、他領からの入学者も来るようになり、明治初年に至るまで約200年にわたり、庶民教育の向上に寄与しました。

江戸時代後期には、県内の各藩で人材育成のため藩校が設置されるとともに、庶民の学問への関心の高まりにより、各地域で教育が展開されました。閑谷学校出身者が教授役となる勉強会が自発的に営まれた例もあります。

江戸時代の県内の寺子屋(手習塾)の数は全国第3位、私塾の数は全国第1位とされるなど、伝統的に教育を重んじる気風がありました。

寺子屋や私塾の教育内容は、読み書き・算数の能力や教養を求める、地域の庶民の要請に応えるものでした。閑谷学校を含め、庶民の学習意欲に応える学びの場が各地域に存在し、そこで学んだ者は本県の各地域で活躍していました。

(先人たちの活躍)

江戸時代後期の人物では、当時の先進的な学問である洋学を修め、江戸で活躍し、我が国近代化の礎を築いた、津山藩の宇田川玄随・玄真・榕庵や箕作阮甫などの優れた洋学者がいます。

また天然痘治療へ貢献した緒方洪庵や、備中松山藩の藩政改革を行った山田方谷など、我が国有数の教育者も世に送り出しています。方谷は、事を処するのに確固たる理念・方針を持っており、彼の精神の根底には、「至誠惻怛(しせいそくだつ)¹」、「士民撫育(しみんぶいく)²」という哲学がどっしりと根をおろしていました。また、「義を明らかにして利を計らず³」と説いています。そして、方谷のもとには、越後長岡藩の河井継之助が教えを請いに訪ねますが、彼との別れに臨んで、「目の前のことにとらわれて本質を見落としていないか、新しい時代(状況)に合った判断であるか、常にふりかえりをしなさい」といった趣旨の言葉を贈っています。こうした方谷の思想や生き方は現代に生きる私たちにも大いに参考になると考えています。

¹ まごころ(至誠)といたみ悲しむ心(惻怛)があれば、やさしく(仁)なれる。

² 領民(国民)を富ませることが国を富ませ、活力を生む。

³ 人として歩むべき正しい道を明らかにすることが大切で、自分自身の利益のみを求めるべきではない。

明治時代にも、西洋の法学を学び、明治政府の法律を整えた津田真道や、岡山を当時の医学教育の先進地とした生田安宅、女子教育の先駆者である福西志計子、感化教育の実践を行った留岡幸助など、県内外の様々な分野で活躍する人材を数多く輩出しました。

2 「教育県岡山」の成立

(学校教育の普及等)

明治時代に日本の体系的な学校教育制度が成立しました。しかし、小学校は当初、設立維持は受益者負担で庶民に大きな経済的負担を課すもので、また、当時は女子に学校教育は無用という考えが一般的であるなど、国が推し進める近代教育制度と庶民の教育意識の間には大きな差がありました。そのため、全国的に小学校の就学率は伸び悩んでいました。

そうした中であっても、本県では、小学校就学率は全国第2位と非常に高く、女子教育でも、高等女学校の数は全国第1位でした。また、第六高等学校や医学専門学校(ともに岡山大学の前身)という、全国的にも数少なかった高等教育機関が設置されました。

(意識の形成)

経済的背景や性別などの要因で、教育が全ての人に行き渡らない時代において、本県の小学校就学率の高さや、高等女学校の設置、第六高等学校の誘致などの学校施設の充実は、いずれも県民の教育への熱心さに基づくものです。

より多くの人々に教育を普及させようという、人材育成に対する熱意や教育環境は全国から高い評価を受け、明治末年には、本県は長野県と並んで教育県として全国に知られるとともに、「教育県岡山」としての県民の意識も形成されました。

3 地域の教育の独自性

(各地域独自の教育の展開)

明治時代には、江戸時代の藩校や寺子屋、私塾を受け継いだ私立学校が設立されるなど、地域による独自で自主的な教育が見られました。

例えば閑谷学校は、西毅一教頭(後に学長)の下、閑谷こ巒として再興され、公立中学校化の後も漢学専修科を置くなど、他の学校とは一線を画していました。

(大正から昭和にかけての状況)

大正時代には中等教育に対する関心が高まり、入学希望者の増加に対応するため、新規設置や私立学校の県営移管による県立中学校の増設が行われるとともに、私立中学校においては、それぞれ特色のある教育が行われていました。

昭和10年代にも入学希望者が増加し、学級数の増加や学校新設で対応しましたが、地元住民の熱心な設置運動と費用負担に負うところが大きいものでした。

また、高等女学校は設立や県営移管による体制充実が進み、人口当たりの女学校生徒数は全国1位であるなど、引き続き、女子教育が盛んでした。

4 戦後の教育体制

(県立学校の整備)

戦後の学校教育法の施行に伴う新学制の実施に当たっては、本県は、戦前から中等教育の普及度が高かったことから、まずは、多くの旧制中学校の新制高校への一斉移行を行い、次いで、大幅な学校の統合や学科の拡充などの高校再編が進められました。

その際には、社会や地域の変化を踏まえ、その要請に応じるとともに、地域間の格差是正を図り、地域に根ざした学校となるような学校の再編とともに、職業教育の充実という観点から、職業科の単独校の増加や学科の再編が行われました。

さらに、工業化の進展に伴う技術教育の振興の社会的要請や全日制高校進学希望者の増加に対応して、昭和30年代後半から工業関係の学校・学科の新増設等を進めるとともに、定時制高校の全日制高校への移行や県営移管が進められました。

一方で、町村組合立定時制高校の県営移管に当たっては、農業関係の学科を設けるなど、地域に即した特色のある教育が行われました。

その後も、都市部への人口集中や中山間地域の過疎化の進行、高校進学率の上昇、高校教育の多様化や特色ある高校づくりへの要請に対応するため、高校の再編を絶えず行っていますが、明治期からのルーツを持つ県立高校も多いことから、地域の伝統を受け継ぎながら、時代の進展に対応した教育の実施や、個性的な学校づくりに取り組んできました。

(引き継がれる伝統)

戦後の新しい学校教育制度に基づいて、学習指導内容の充実や教育環境の整備が進むなど、教育のソフトとハードが揃う中、昭和30年代に実施された全国一斉学力調査においては、本県は実施期間中の全ての年で全国上位という結果でした。

また、社会教育分野においても、閑谷学校の環境と伝統を保護・継承するとと

もに、心身ともに健全な青少年を育成することを目的として、岡山県青少年教育センター閑谷学校が設置されたり、「友情・秩序・奉仕」の精神を少年期から養う目的で、本県独自の少年団体である岡山県FOS少年団連盟が結成されるなど、様々な機会を通じた教育活動が行われています。

さらに、大学進学率が全国上位にあることを背景に、地域社会の多様な要請に応える高等教育機関として県立大学が創設されるなど、多くの大学・短大が集積するとともに、技術系の大学、短大や工業系の高等学校の数も西日本有数となっています。

教育の普及に対する熱意や教育環境の整備など、教育県と呼ばれる伝統は 21 世紀にも引き継がれています。

5 これからの岡山県の教育

(現状と課題)

平成 16 年に公表された国際的な学力調査の結果において、我が国の児童生徒の学力が低下傾向にあることが指摘され、学力水準の保証に対する社会的な関心や要請が高まりました。こうした状況を受け、教育施策の成果や課題を客観的な数値を基に検証し、より適切な教育を行おうとする中で、43 年ぶりの全国的な悉皆調査である平成 19 年度全国学力・学習状況調査が実施されましたが、その結果、本県の厳しい学力の状況などが明らかとなりました。

その後、県を挙げての取組により、学力については、平成 31 年度全国学力・学習状況調査の結果、全国平均程度になった一方で、中学校の家庭学習時間は全国平均と比べて短い状況にあります。

また、不登校の出現割合は、全国の傾向と同様に増加するとともに、小学生を中心に体力・運動能力の低下傾向が見られます。

こうした課題の改善の成果が客観的な数値として現れることも、県民に受け継がれてきた、教育県としての意識に適うと考えています。

併せて、グローバル化の進展や Society5.0 の到来など、予測困難な未来社会を自立的に生きていくためには、正解の存在しない中でも、様々な状況に応じた納得解を見出せなければなりません。そのため、自分を高め、主体的に挑戦し、変化に対応できる力として、意欲や自制心、協調性など、数値では測ることのできない、いわゆる「非認知能力」の育成も必要になります。

(今後の学校教育)

現行の学習指導要領等では「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性等」の育成や、学校が社会と連携・協働しながら、これらの資質・能力を育む、「社会に開かれた教育課程」の実現が求められています。

また、令和 3 年 1 月の中央教育審議会の答申では、「全ての子供たちの可能性

を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」として、1人1台の端末と高速通信ネットワークを整備する「GIGAスクール構想」の推進による学習活動の充実や、明治以来の知・徳・体を一体で育む学校教育の伝統を組み合わせるとともに、地域と一体となって子どもたちの成長を支えていくという、今後の学校教育の方向性が示されています。

（「教育県岡山」のこれから）

教育においては、どんなに社会が変化しようとも、「時代を超えて変わらない価値のあるもの」（不易）があります。豊かな人間性、自らを律しつつ他人と協調し、他人を思いやる心や、公共の精神に基づき主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度など、こうしたものを子どもたちに培うことは、いつの時代の教育においても大切にされなければならないことです。こういった、「時代を超えて変わらない価値のあるもの」を子どもたち一人ひとりにしっかりと身につけさせる必要があります。

一方、教育には、「時代の変化とともに変えていく必要があるもの」（流行）もあります。グローバル化の進展や Society5.0 の到来など急激に変化していくと考えられる社会の中にあって、教育について絶えずその在り方を見直し、改めるべきは速やかに改めるなど、社会の変化に教育が的確かつ迅速に対応していく必要があります。

これら教育における「不易」と「流行」を十分に見極めつつ、子どもたちの教育を進めてまいります。

社会が大きく変化していく中、本県がこれからも発展し続けるためには、将来を担い、社会の創造・発展に積極的に貢献できる人材を育てていくことが極めて重要であり、県政の総合計画「第3次晴れの国おかやま生き生きプラン」では、重点戦略に「教育県岡山の復活」が掲げられています。これから目指すべき「教育県岡山」とは、県民の教育を重んじる気風のもと、全ての子どもたちが安心して学ぶことができる環境が整うとともに、学力や豊かな心を持ち、健康で気力が充実し、グローバルな視点を持って本県の持続的発展に貢献できる人材が育つ岡山の実現です。

このため、「第3次晴れの国おかやま生き生きプラン」や「第3次岡山県教育振興基本計画」に基づき、子どもたちが積極的・主体的に学びに取り組んでいけるよう、自らの夢を育み、その実現に挑戦していく経験を通して、意欲や自信などの「自分を高める力」を育てる「夢育」に、学校・家庭・地域など様々な学びの機会を通じて取り組み、知育・徳育・体育の促進にもつなげてまいります。

各学校で取り組む「ふるさと学習」や「地域学」などにおいては、学びの場を、学校よりも多様性の高い地域へと広げ、多様な関係者と地域を題材とした学習を行うことで、「正解」のない「問い」を自分たちで探し、「より良い答え」を導き出すという、これからの社会を生きる上で必要となる力を育むとともに、地域の良さを発見・再確認し、郷土に対する愛着を育み、また、夢や目標の実現に向

けて粘り強く挑戦する姿勢を育んでまいります。

こうした学習は、現行の学習指導要領等で求められる「社会に開かれた教育課程」の実現に合致するとともに、子どもたちが、他者の立場を理解したうえで、自分の主張を述べる活動などを通じ、多様性を尊重する態度や互いのよさを生かして協働する力を身に付けられるものです。加えて、「教育県岡山」の源流とも言える、江戸時代以降の本県に根付いていた、地域の要請と結びつき、学習者の学習意欲に応える学びということにも相通じるものと考えています。

さらに、ICTを主体的に使いこなす力や、他者と協働し新たな価値を創造する力の育成に向け、スーパーサイエンスハイスクールの指定、理数・情報コンテスト等への参加、STEAM教育の研究、企業と連携した商品開発など、理数教育や探究学習の充実に取り組んでいるところであり、現在、本県の子どもたちは、科学オリンピックや地域振興に関する政策提案コンテストなどの全国規模の大会でめざましい活躍を見せています。

これらは、かつて本県で盛んであった洋学のように、新しい時代の要請に応える先進的な学びを実践する姿勢を受け継いできたものです。

私たちの祖先は郷土を愛し、熱意を持って地域を担う次世代を育成してきました。子どもたちが、将来、郷土岡山を担う人材として成長するために、これまで培われた教育の土壌や姿勢をしっかりと受け継ぎ、基礎基本となる知識・技能に裏打ちされた確かな学力を身に付けられるよう取り組んでまいります。併せて、かつての岡山の教育が「全国の手本」であったように、これからの時代に必要となる資質能力の育成に向け、ICTの積極的な活用や課題解決型学習（PBL）を一層推進し、新しい教育を岡山から発信してまいります。そのためには、学校教育だけでなく、学校・家庭・地域が連携・協働し、社会全体で子どもたちの学びや成長を支えることが重要であることから、教育関係者をはじめ、県民の皆様のご協力が不可欠です。これらの実現のため、皆様と一丸となって「新時代の教育県岡山」としての歩みを進め、「自立」「共生」「郷土岡山を大切にする心」といった3つの資質能力を備えた、「心豊かに、たくましく、未来を拓く」人材を育成してまいります。

(参考文献)

- 「あつ晴れ岡山人」刊行委員会 『あつ晴れ岡山人』、2010年。
- 岡山県教育委員会 『岡山県教育委員会五十年の歩み』、1998年。
- 岡山縣教育會 『岡山縣教育史』、1947年。
- 岡山県教育広報協会 『岡山県教育史・続編』、1974年。
- 岡山県教育広報協会 『岡山県教育史(昭和三十一年～五十年)』、1991年。
- 岡山県教育広報協会 『岡山県教育史(昭和五十一年～平成七年)』、2006年。
- 岡山県教育広報協会 『教育時報 2020年8月』、2020年。
- 岡山県史編纂委員会 『岡山県史』 山陽新聞社、1988年。
- 時事通信社 『時事通信 内外教育版 昭和37年6月5日』、1962年。
- 柴田一、太田健一 『岡山県の百年 県民百年史 33』 山川出版社、1986年。
- 中央教育審議会 『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について 第一次答申』、1996年。
- 中央教育審議会 『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～』、2021年。
- 特別史跡閑谷学校顕彰保存会 『増訂 閑谷学校史』 福武書店、1987年。
- ひろたまさき、倉地克直 『岡山県の教育史』 思文閣出版、1988年。
- 方谷さんに学ぶ会 『運命をひらく山田方谷の言葉 50』 致知出版社、2017年。
- 文部省 『学制百年史』 帝国地方行政学会、1972年。
- 文部省 『学制百二十年史』 ぎょうせい、1992年。
- 山田方谷顕彰会 『入門 山田方谷』 明德出版社、2007年。